ホームページ　http://www.nihonkanpoukyokai.com/
E-mail:　j.kampo@jeans.ocn.ne.jp

日本漢方協会通信

２８年　７月　1－1

坂本順治監督映画「団地」に協力しました

日本漢方協会では、今年６月に封切りの「団地」の撮影に協力しました。息子を亡くした漢方薬薬局の夫婦が、団地に引っ越してから、宇宙人５万人分の漢方薬を作り、息子に会えるという話です。どんな漢方薬が良いか、５万人分の薬の量、その原料の量、保存法等を検討して、理中丸薬を１回１粒服用するという想定になりました。５万人が１粒服用すると生薬は１回分５kgですみ、団地でも可能だと思われたからです。丸薬の製造場面では、今井会長の粉砕器・篩い、切丸器・製丸器が登場します。正しい丸薬製造方法で、学習資料にも使えそうな映像でした。

三上記

岸部一徳、藤山直美と息ぴったりの夫婦役、阪本映画の現場を語る【映画 com より】

●人間ドラマの名手・阪本順治監督が、2000 年の映画賞を多数受賞した「顔」の藤山直美を 16 年ぶりに主演に起用し、藤山のために完全オリジナル脚本を書き下ろした新作「団地」。漢方薬局を畳んで団地に引っ越した夫婦の物語を軸に、団地の住人たちの奇妙な人間関係が展開し、アッと驚く奇想天外なラストが訪れるコメディタッチの会話劇だ。藤山演じる生真面目な妻と、どこか浮世離れした夫役で抜群の掛け合いを見せるのが、岸部一徳。「とにかく、阪本監督と藤山直美さんの映画を一緒に作れるのが楽しみだった」という岸部が、公開を前に作品を語った。（取材・文／編集部）

●日本を代表する喜劇女優の藤山とは「顔」をはじめ、これまでドラマでも共演経験があるが、映画での夫婦役は今回が初めて。40 年来の付き合いがあるそうで、長年連れ添った夫婦の間合いを、関西弁でユーモアたっぷりに演じている。「団地に住んでいる夫婦の設定で、奥さんが（藤山）直美ちゃんというだけで、すぐに雰囲気はつかめましたし、彼女と一緒に演じれば、自然に夫婦に見えるんです。お互い関西人ですし、言葉の不自由さもありません。（物語の）最初から最後まで二人で演じたのは初めてですが、とてもやりやすかったですね」

●主人公・山下ヒナ子の夫の清治は、植物図鑑を片手に近所の林を散策するのが日課。ある日団地内で起きた出来事がきっかけで、「死んだことにしてくれ」と床下の収納庫に身を隠してしまう。一見、どこにでもいそうな初老の男だが、同時に世捨て人のような不思議な雰囲気をまとっており、岸部の名演を存分に楽しめるキャラクターだ。岸部自身も「こういう人になりたい」と思うほど気に入った役だという。「今回の役（清治）は、こんな人になりたいと思いながら演じました。漢方を作る作業は面白かったですし、ずっとこのまま生活してもよいくらいの感じでしたね。床下に潜ってくれと言われても、僕にとってあまり無理はなかったです。とんでもないことでもなく、こういうこともあるのかな、と、つい思ってしまうような（笑）。自分の中にある面白さ、こういう感じ好きなんだ、というのが良く出ている映画」と、旧知の仲の阪本監督が岸部にあて書きした人物を楽しんで演じた。

●映画、ドラマ、CM とあらゆる場面で特異な存在感を放つ怪優の役選びは、脚本を読み「自分が面白がれるかどうか」がすべて。一世を風靡した音楽活動を経て、本格的に俳優に転向し 40 年という長い芸歴のなか、新たに挑戦したいことを尋ねると、「新しいことをすることだけがチャレンジではなく、本来自分が持っているもの、自分のこだわりを最後まで突き通せるかということのほうが、僕にとってはチャレンジかもしれません」とぶれない軸を持ち続ける。

●阪本作品へは９本目の出演。「監督として評価されて欲しいけれど、評価されすぎて遠くにいかれても困るなあと、どこかで思ってしまうような愛すべき人」と親密さと信頼感を伺わせ、大楠道代、石橋蓮司ら阪本映画の常連が集まった現場を「みんな長い付き合いの方たちばかりなので楽しいのですが、阪本さんには映画監督らしい神経質な部分があるので、俳優も役を演じるだけでなく、阪本映画をみんなで作っていくという意識が強い。そういう意味でも、この作品には阪本映画の良さが特に出ている」と振り返る。そして、最後にこう結んだ。「僕は長年いろんなことやっていますけど、やっぱり映画が好きなんです。映画をやっているときが一番楽しいんですよ」

［映画.com ニュース］【映画 com より】

女優の藤山直美が、6 月 19 日に閉幕した第 19 回上海国際映画祭で、日本人初となる金爵賞最優秀女優賞を受賞した。日本から唯一コンペティション部門にノミネートされた阪本順治監督作「団地」で、拡大していく近所の噂話に巻き込まれる主婦を演じた。

藤山は、「阪本監督の演出に従った結果、賞をいただいたわけですから、この賞は監督の手腕によるところが大きいと思っています。阪本監督が喜んでくださるなら、私もとても嬉しく思います」と、数々の映画賞を受賞した「顔」以来 16 年ぶりにタッグを組んだ阪本監督への信頼を明かし、「共演者の皆さまの存在も大きかったです。共演者の皆さまにも心から感謝申し上げます」とコメントを寄せている。

阪本順治監督　映画「団地」に協力しました

薬局製剤学会、日本漢方協会では今年6月4日(土)に全国でロードショウされる「団地」の映画製作に全面的に協力しました。

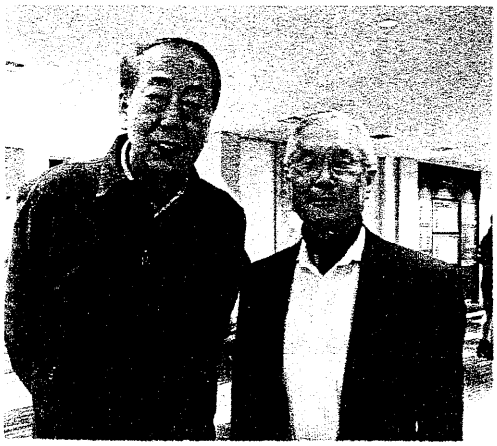
多くの映画賞に輝く映画を作成している阪本順治監督の依頼により、宇宙人の漢方薬を作るシーンでの丸剤を作るための粉砕、ハチミツ練合、球形丸剤を造る一切の用具の貸与と製剤技術指導に協力しました。

三上先生が資料など、今井が製剤用具を担当しました。

映画は漢方薬局を継いだ倅を亡くしたために、漢方薬局を閉めた藤谷直美と岸部一徳の薬剤師夫婦が、団地に引きこもり、地下室に漢方生薬を貯えていたところ、宇宙人の下痢を治したいと漢方薬の製造を依頼され、宇宙人5000人分の理中丸を団地の台所でつくることになりました。生薬を粉砕し、ハチミツで練合し、丸剤を丸め製造するシーンから始まります。思いの外綺麗な丸剤に仕上げています。薬局製剤の実習映画のようです。

気分転換に団地の裏山に植物の本を持って出かけ植物観察をするところなど、日常をみられているようです。

ぜひ、この映画「団地」をご覧になっていただきたいと思います。



右の写真は映画試写会に招かれた折り、岸部一徳さんとのショットです。

（記　今井　淳）

会員各位

一般社団法人化のお知らせ

会員の皆様には、日頃より当協会の活動にご協力を賜りまして、誠にありがとうございます。

日本漢方協会は、平成二十八年六月十七日をもちまして法人化し、「**一般社団法人日本漢方協会**」として新たなスタートをきることになりました。

今後も漢方に関する研究を深め、また漢方の普及活動に尽力して参りますので、引き続きご理解のほど宜しくお願い申し上げます。

略儀ながら会員の皆様にご報告申し上げます。

一般社団法人　日本漢方協会
会長　今井　淳